

受託団体名	石川県立小松瀬領特別支援学校
-------	----------------

事業実績報告書

I 講習対象 ~~理療—理学療法—聴覚障害教育~~ 教員の資質向上

II 事業の実施日程

事業項目	実施時期												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業			講 1 ①		講 2 講 4 ①	講 3					講 1 ②	講 4 ②	

III 事業の実績の説明

1 講習会のテーマ

肢体不自由等の重度重複障害の児童生徒が、自己の五感を活用して学習活動に向かい、主体的・対話的で深い学びにより育成をめざす資質・能力を獲得することができるように、教職員の重度重複障害教育における資質向上を図る。

2 講習会の日程

(1) 講習会 1 「肢体不自由教育における Playful Approach」

日 程：①令和元年6月14日、②令和2年1月17日

会 場：石川県立小松瀬領特別支援学校

定 員：30名程度

受講者数：①28名、②28名

(受講希望者数：①29名、②29名)

日 時	タイトル	講 師	概 要
①6月14日 授業見学及び 事例検討 13:15~15:10 講義 15:30~16:55	「ユニバーサル フレームで楽し く学ぶ」	びわこ学園 医療福祉センター 草津 リハビリテーショ ン課 課長補佐 高塩 純一	子供の運動発達の基礎を学ぶと共に、 Playful Approach の考え方を取り入れ、児童 生徒が主体的に取り組む自立活動などの授 業づくりについて考える。
②1月17日 授業見学 事例検討 10:05~14:45 講義 15:30~16:50	Playful Approach の提案 ～子供の楽しい 主体的な学びを 育む～		児童生徒の主体的・対話的な深い学びを中心 に、自己の授業実践を振り返る。

講習の実施結果

県内唯一、肢体不自由単独の特別支援学校の講習会ということもあり、他校の肢体不自由児童生徒を担当している教職員や保護者、関係する施設職員の参加があった。

前半は、講師が各学部を回って実際に児童生徒に接し、教職員に対して関わり方についてアドバイスを行った。直接関わられる姿がとても温かく、また指導が具体的でわかりやすく、大変参考になった。後半の講義では、「Playful first」という言葉を大切に、児童生徒が楽しく遊んで身体を動かす中から、力を発揮していけるようにすることを学んだ。講義の中で紹介された、重度重複障害で気管切開をしている児童が、器具を使うことでどう動けるかを考え、笑顔で歩いている嬉しそうな表情の映像が印象的であり、参加者が児童生徒の将来を考えていく上でのイメージになったと考えられる。海外での取り組み状況を知ることでもでき、参加者も楽しんで学べる内容であったことから、研修会後のアンケートでは、「もっと話を聞きたい」という回答が複数あった。

また、児童生徒が自ら物事を認知し、発信につながるように、授業の中に視線入力装置の活用を取り入れた。楽しんで、画面に注目している様子をうかがうことができた。今後の指導における有効性を感じることができた。

障害のある者の受講への対応結果

・特になし

(2) 講習会 2 「スパイダーシステム ユニバーサルフレーム研修会」

日 程：8月29日

会 場：石川県立小松瀬領特別支援学校

定 員：30名程度

受講者数：30名

(受講希望者数：32名)

日 時	タイトル	講 師	概 要
8月29日 実践事例検討 13:15~14:20 講義及び実技 14:30~16:50	「ユニバーサル フレームで楽し く学ぶ」	びわこ学園 医療福祉センター 草津 リハビリテーショ ン課 課長補佐 高塩 純一	安全で効果的なユニバーサルフレームの活用を学び、児童生徒の心身の伸びを促すと共に、校内のユニバーサルフレームプロジェクト体制の充実を図る。

講習の実施結果

夏季休業中ということもあり、保護者や学校関係者、施設職員などが比較的参加しやすい研修日程であったと思われ、本校教職員以外の参加人数が多かった。またHP や文書案内等で、スパイダーシステムに特化した内容であること、児童生徒の事例検討を直接参観できることを周知したことなども、受講者数が多かった要因であると考えられる。

本校では、校内ユニバーサルフレーム活用推進プロジェクトチームにおいて、学期ごとに支援の効果や課題について話し合いの場を設けている。今回の研修では、プロジェクトチームが中心となり、現在スパイダーシステムを使用している児童生徒一人一人に合わせた、より効果的な支援の在り方、使い方について、実際の指導を見ていただき、直接指導助言を受けた。その場で講師と質疑応答を行い、短期及び中長期の継続した効果的な支援方法について学ぶことができたのは、とても有効であった。これらを受け、各学部で情報共有し、学部及び学校全体での取り組みについて見通しをもつことができ、とても良い研修会とすることができた。一人一人の特性に合わせた実践的で即時的な助言や指導を受けることができ、事例検討担当者や参観者から、「とても効果的であった」という意見が多く寄せられた。保護者からも、「児童生徒が自ら動き、楽しんでいる姿を見ることができ、参加してよかった」という意見を受けた。ただし、一人の児童生徒につき約20分間の実践であったため、「もっと一人一人の活動実践を長く見たかった」という意見もあり、時間設定を弾力的にすべきであったという反省がある。講義についても、事例検討に合わせた内容であり、事例検討で得た助言や指導をさらに深めることができた。一方、教職員の実技体験もあり、内容が盛りだくさんであったことから、「事例検討を長くした方がよい」という意見もあったので、今後の検討課題としたい。

障害のある者の受講への対応結果

・特になし

(3) 講習会 3 「障害の重い児童生徒の各教科及び自立活動の授業づくり」

日 程：9月19日

会 場：石川県立小松瀬領特別支援学校

定 員：30名程度

受講者数：30名

(受講希望者数：31名)

日 時	タイトル	講 師	概 要
9月19日 授業参観 10:15~14:00 授業整理会 14:00~15:00 講義 15:30~16:50	障害の重い児童生徒の各教科及び自立活動の授業づくり	筑波大学 人間総合科学研究科 教授 川間 健之介	子供の言語発達の基礎を学ぶと共に、学習の習得状況把握等に基づく授業づくりについて共通理解を図る。それらをカリキュラム・マネジメントにつなげ、系統的・専門的な自立活動を主とする教育課程の充実を図る。

講習の実施結果

<p>外部の希望者が6名と比較的多く、障害の重い児童生徒を担当する教職員にとって、授業づくりというテーマについては関心が高いと考えられる。</p> <p>当日は、各学部で作成した学習指導案を基に授業を見ていただき、授業整理会も実施した。講義では、障害の重い児童生徒に対する、自立活動の指導についても、各教科等と密接な関連を保つ必要があり、学習指導要領を根拠にして授業実践をしていかなければならないという内容をうかがった。参加者のアンケートからも、「新学習指導要領に基づいて授業を構築していくことが重要であり、今後充分に考えて実践して行くことの基礎となる話を聞くことができてよかった」や、「自立活動の中にも教科の内容を意識していきたい」等の回答が多くあった。内容が濃く、時間が足りず、もっと詳しく説明をうかがう時間があればよかったと思われる。</p>
--

障害のある者の受講への対応結果

・特になし

(4)講習会4「先進校の取り組みから、本校の取り組みを考える」

日 程：①令和元年9月27日、②令和2年2月21日

会 場：石川県立小松瀬領特別支援学校

定 員：25名（本校職員）

受講者数：①22名（本校職員）、②25名（本校職員）（受講希望者数：①25名②26名）

日 時	タイトル	講 師	概 要
①9月27日 講習会 16:00~16:55	先進校の取り組みから、本校の取り組みを考える	先進校視察教員	先進校、施設等の視察研修から得た情報や学びを校内に還元し、最新の理論や技術を取り入れた支援のあり方について共有する。 ・びわこ学園医療福祉センター草津 視察 ・滋賀県立草津養護学校 視察 ・第43回日本肢体不自由児教育研究大会
②2月21日 講習会 16:00~16:55	先進校の取り組みから、本校の取り組みを考える	先進校視察教員	先進校の視察研修から得た情報や学びを校内に還元し、自立活動の指導の捉え方や教育活動全体での生かし方について共有する。 ・筑波大学附属桐ヶ丘支援学校 第48回肢体不自由教育実践教育研究協議会 ・京都市立北総合支援学校研究発表会

講習の実施結果

<p>視察研修を行った教員より、校内教職員に還元するための報告会を実施し、報告及び質疑応答の時間を設けた。</p> <p>びわこ学園医療福祉センター草津視察の報告では、訓練時に使用する肢体不自由児の身体機能改善・向上を促す器具についての説明があった。説明の中で、児童生徒が自ら様々な動きを経験できるような場面設定や環境設定の他にも、「遊びの要素」を含みながら本人の「やりたい」気持ちを引き出すことが重要であることを学んだ。報告には、器具や室内環境についての写真や動画があり、より理解を進めることができた。</p> <p>また、日本肢体不自由児教育研究大会参加報告では、障害の重い児童生徒の授業づくりについて、コミュニケーション指導を中心に留意すべきポイントについての報告がなされた。研究大会当日に</p>
--

実際に作成した教材が紹介され、簡単な材料で、児童生徒の主体性の発揮を促す教材を作ることができることを学んだ。

受講者からは、「日々の児童生徒との関わりをあらためて見直す機会となった」「自立活動等の授業を計画する際に意識したい」等の意見があった。様々な先行実践などの報告から、本校のより充実したカリキュラム・マネジメントに向けて、参考となる事柄を得ることができた。

筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校実践研究協議会参加報告では、自立活動を主とした教育課程で学ぶ児童の、算数科の指導のあり方について説明があった。児童生徒の様子を的確に見取り、着実に力を伸ばしていく各教科の指導のあり方について考えることができた。

京都市立北総合支援学校研究発表会からは、授業改善と専門性の向上のために、縦割り研究グループを編成することや促進フレームワークを活用した実践について報告された。「12年間で育てたい力」を明確にすることや、カリキュラム・マネジメントの体制作りの大切さについて学んだ。

各先進校の視察報告を受け、指導を考える際には、常に「学習指導要領」に立ち返ることの重要性について再確認した。

障害のある者の受講への対応結果

・特になし

3 講習会の実施体制

所 属 (団体名)	職 名	氏 名	事業における役割
びわこ学園 医療福祉センター草津	リハビリテーション課 課長補佐	高塩 純一	講師
筑波大学	人間総合科学研究科 教授	川間 健之介	講師
石川県立小松瀬領特別支援学校	校長	小山田 真由美	事務局
	教頭	中川 博俊	運営事務
	部主事	坂口 桂子	運営事務
	教務課長	今川 陽子	運営事務
	自立活動主任	林 秀樹	運営事務

IV 事業の成果

4回の講習会において、指導票や学習指導案をもとに、児童生徒の現在の様子や特性を踏まえた上で事例検討を行い、講師から直接指導・助言を受けたことで、教員が即時的に有効な学習指導方法や支援方法について学びを深めることができた。講義では、肢体不自由の児童生徒に対する効果的な支援や事例、海外の取り組み状況などを学ぶことができ、教員の視野を広げる学びにつながった。教員の中に「Playful Approach」という概念が位置付き、児童生徒が主体的に学ぶためには、五感を活用して、楽しんで学べる学習活動を設定していくことの重要性を学んだ。

スパイダーシステムについては、今回の講習会において、講師による実際の指導場面を見たり、教師自身が体験したりできたことによって、全教職員、保護者がスパイダーシステムを活用した支援の在り方と有効性について情報共有し、理解を深めることにつながった。児童生徒が、生き生きと主体的に身体を動かし、普段行わないようなダイナミックな動きを自ら行う姿を共通理解することにより、自立活動の時間にスパイダーシステムを積極的に活用していくことを再確認することにつながった。

授業づくり講習会では、新学習指導要領についての理解を深めることができた。児童生徒の各教科の内容の習得状況を把握し、一人一人に各教科の内容を押さえていく必要があることを、再認識する機会となった。

全体を通して、自立活動における効果的な指導の在り方、及び新学習指導要領に基づいた各教科の内容を押さえた授業づくりについて理解を深めた。先進校などの取り組みについても情報共有し、本校児童生徒の実情に沿った内容で、実践に即取り入れることができる指導方法について

学び、教材研究を深めることの大切さについてあらためて考えた。さらに児童生徒の短期的な目標だけでなく、将来にわたって必要とされる力を身に着けるための、中長期の目標を意識して内容を見直す重要性について学ぶことができた。主体的・対話的で深い学びにより、育成をめざす資質・能力を獲得することができるよう、多様なアプローチの仕方を学ぶことができ、教職員の資質向上に大きく役立てることができた。

V 今後の改善事項と方策

新学習指導要領についての理解を深め、教育課程の編成を行う必要があることを再認識する機会となったことから、児童生徒が内在する力をより発揮できるよう、あらためて全教職員で新学習指導要領を本校においてどのように具現化していくかについて、共通理解する必要がある。その視点で、年間指導計画や個別の指導計画、学習指導案等を作成、評価、改善し、有効なカリキュラム・マネジメントを進めていくことが今後の課題である。

今回の事業においては、自立活動及びその他の指導において、実践的な方法を学ぶことができたが、効果的な支援につなげるためには、児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達段階等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にして個別の指導計画を作成する必要がある。タブレット端末や視線入力装置等のICT機器等も有効に活用し、具体的な指導内容の設定、授業実施状況の評価と改善など、指導と評価の一体化を行うことが重要である。実態把握、目標の共通理解、連携を円滑に行うために、教職員同士で児童生徒について話し合う機会を十分に設け、PDCAサイクルを組織的に機能させていきたい。